



清々文集卷之三

目録

- 一 田九郎玄清子婿の酒徒評
- 二 守氏玄清の奥書
- 三 春棠窓の銘
- 四 雑話 十二章
- 五 病中倦夜
- 六 挽詞并林、をス
- 七 青錦堂の記并道行
- 八 幸化小を、たる文

九 流斜る人、く子紙
十 其舟より其葉を擲る事
十一 其舟より其葉を擲る事
十二 白拍子能信儀
十三 大圭碑文の文
十四 間脈乃くもふ
十五 頼光綱子令れを返す画の價
十六 拾八口きし傳ふみ
十七 掬雪くもふ事

工造三石の事

十八 武陽渭水へをス
十九 阿保院の画乃禪
二十 七世法皇の御文
廿一 雑詠四章 并、吾答
廿二 十七回小堀の文句
廿三 勸學子歌
廿四 嗅洞亭小堀の禪
廿五 戸田氏三回忌集之序
廿六 妻小おろけの人の許へ了る
廿七 林外老人へ贈る年賀

廿八 後東亭

廿九 野人へはらりて

三十 小野天神を納め給



第一 佃村九郎云湯不禱る

酒徳禱

老人あり雲云哉幕トガリふし亭雨月をを結し堤
 をかみ席みそ心多残也。心の如く小朝夕をも
 祈り治世の中乃治を承ふのなり。武功の余光を頂
 き子孫の口ををわくはた海うらた。幸くくけりて
 ち才ハ決り田乃里の喜秋をメて志如也屋煙。
 起ると看之。夜更えても又看む。醉時ハ川風平吹
 きてさむき存静は無残也。さの決きめくくさ家
 獨乃夕アハきぬを脱き足をもよして石船く燈

古記云
 口さたぐ
 梅のりく
 五部書ニ
 佃ツクリタ



なりよは福く。んぬれ人折あへて茶碗を出入
此いし紙をうるとよあこひ散るかゝらを教き三
盃と又六盃をみ流う強ひて仰うて。神
風乃いされよう。曲しぬんう。君子れ道も佛の教
も心裏おの流う。仰うて。誠平阿うて。さ老
乃張ひ

おといよ
ほのこし
んをやるふ

心をやるなりあふ志うぬやと

雪寒うぬ人のその素衣老人のうへう。劉
伯倫^{ハチロウ}掛を左衣の味方と仰して。程確を又看む。
一人能明白うと求とのふ志く抱そなた

才二 守武志守之奥書

六波羅密寺のおとよりよと流き来とつふ津岸あり。常に古
人乃それ癖をそへ世う埋る古人の巻をある
りた事。間平髪と入る。人の老弱秘伝。ち本の小
式紙よ句平あへてををうて。宝とてとて。あは
予是哉。予あへて書一刺とてと。第ふ時をそく
今角倉乃又庫ふと仰り。西本のうう。徳信のそは。
ちうそけい。武士乃んもわう。く。屋一物く。うと
才のら。徳く

才三 春棠へ遠ス窓の落

高卧し
劇明語之

高川北窓下。自謂義皇上人と。清風の来きく可
嘯きくそひく藝我拂くそ好む。後人陶窓

飛ヒレン窓ノ名ナリ

と呼てうやみうやむ。羨まきくその夕日至きん。
屋上子飛窓孔を正別あきく。天地怒きく時を吹

怒怒於於士士囊囊之
口口風風賊賊

草花葉のゆるかき。地洞不きくおくこ。甘の心ん
名れあくた日も吹。流たく好くそ。夕言於吹く。川を夜

して日言き。甘乃氣をよさんと好くそ。そをよ。
よさんと好くそ。よの系おとへん涼。かり。忽お燕の

日乃氣をよ。是哉又して夜日子遊ふをよ。崇之。屋

卵窓と好くそ。よのを好く日く故人を能あ好く

屋卵窓ハ
屋根ヲ切リキ

窓ヲ明ルヲ
彩ニ号ク

この世

涼しさの富貴と来くう松乃存

昔了傳の志我幸なり

寺四雜話

一蒼顔子又書を教へる。語今飛来くそ一字もよ

心事改くそ。別進の邪をよ。て飛言へ。手跡も

先祖を好くそ。なるを追く。手跡れ文字細工を繕りく。ては情

日了す。そを和漢おとる。子の自中を感。一書之。紙紙

て。そ。通。日。我。窓。く。さ。る。若。ハ。眉。を。擧。めて。能。畫。と。好。く。然

とも風雅のれきひ深う。如人の手跡を額すも。けお

ふもつたなきもよの也。自慢をいひあつて守るべくは
 あり。因以謝聲、謝画をすへしなるといへば、信輔もその趣兼
 好もよと拙なうと云はし、其すともを非弁くるといふ。
 傍人の子を時危す、其同家の事、わけて筆道吐し、其用の
 事と笑ふ、予云非也。更、漢先生と能書の名有る人
 なり、一りす、すく、そのをいひて、今て下れ、名、其、信、
 也、又、其、一、初、の、付、張、を、ん、その、う、へ、一、字、を、を、懸、く、ん、ま、を、か
 も、又、其、の、道、理、を、一、く、く、を、も、も、も、も、も、の、ゆ、く、と、か、じ。
 強、聲、謝、を、を、見、て、甚、悦、ぶ、へ、一、や、大、笑、あり、う、う、。長、夜
 版、淋、く、厨、飯、あり、や、や、ア、僕、云、有り、何、う、菜、有、れ、れ、と

ア、カ、有、ト、云、何、ッ、と、ア、九、年、母、之、ツ、あり、と、云、世、を、窮
 不、し、も、お、と、け、う、と、又、大、笑

一、東、坡、の、信、の、工、ま、も、字、達、の、画、一、も、晴、ふ、あ、ひ、う、う、と、云

一、光、悦、生、涯、の、心、言、を、甲、斐、國、身、延、山、長、廊、下、れ、刺、口、の
 額、不、て、お、と、い、ま、う、く、く、く、通、長、ノ、二、字、あり

一、名、ふ、阿、の、を、を、う、め、ら、を、進、磨、大、海、不、て、お、り、ま、を
 九、年、面、壁、と、て、名、者、名、僧、和、漢、お、も、背、あ、く、何、像、哉
 念、一、く、も、愚、東、大、惜、の、祖、九、年、の、月、磬、ふ、む、く、ひ、て、尻、を、腐
 ら、一、悟、う、う、う、を、至、て、不、焦、用、を、を、不、と、ま、九、念、面、壁、如
 死、ん、三、念、一、念、而、悟、如、法、禪、一、二、三、と、念、し、て、二、念、ふ、り、何

日其時より本と成りて下界三三と成りて如く
風雅の後有まくりたるよなるおふあり一美人を
壓千人を感せしめてもわづ神さし下界も一家者
流をさく上界を遠くせたりひくして月雪花江等
をさけしみつゝ分毫を忘るゝものなり上界必衆
口金をさくしけりて下界一を道徳純一してはく如く
時を牧業の書したるごとく回ふ發を容れ白をくち
黒を遣ふを早し一人をさくさくさくしてはく如く
の本をふありて神意なりけり鬼神を感せし病
魔を退き雨を祈り名を以て國を通り悪善をね

ふ是等神意なりけり如く一人をさくさくさくしてはく如く
系子能く配まると神之主其態のつりまふふありて風雅
ハ家と氣の如くち不空心有有意をむすむつり氣と心は
たぐひひよく勝時を佳句とかり心と氣相和す時と地
乃句と勝りの也心不氣の中けり時と地あり佳句と地
也此ありて是ふありておを下界と云へ一神界の令欲
を心はかりて是より上より下よりあり
一昔仏主座の大方上流の時さくさくの
いつし一頁ふつをみりて花のきりりる
ずんびりりり桶とぢの花

此一子一母を古きとあり略す

一子教ふ子日 桐花 胡やめ 七夕 菊

四季の星つみと云 侍りと云 花をぬと云 星

教と月見小夜の御城之御能を物々宵の星小

蔵物并て正しく委枕上より立をまひ星つみ

一子り三子裡に習ひたりと見て 東ハ明りたり 感

くして一子も忘る日 翌日 甚く星教を打られた甚御

接姫すれどもい何と云 星教の君はつれと御上意

ふてありし時 此星の中も亦と云 習りとは了上

くく花をとり 之樂座への上役ふ 是をくたり

と此星をつみの星ハハハと云 三つ星をわたり

花をぬを當てふ 了上侍りよ 乞ふよ 了て幸

く 亦小蔵物并て 尊之今と云 不絶已 結念

らと云 一各に 紫重ゆと云 月見を 哥

お心をよき 一の之 礼教を 必風雅お心なく 是

つふも 事也 強の 文候 けりす して 是 辨

も 一も 亦も けり 形 けり 心 けり けり けり

けり 通知 する 事 あり 昔 一老人の 夜話 有

一 宰予 晝寝 子曰 朽木 不可 雕也 下 畧 あり 是 後

き され とも あり 呵 呵 あり あり あり あり

乃其子老の良を以てり。唐子孫合せさうく日本の
 道理を通じり家々の事よりくまなむいとま
 後と不源氏にてふをなを能く存返りへん時々の
 如へ一宰予畫いぬりくくとりくの事ふよみく
 けりも支子の不様始るけりまてあきく色未揃
 最の爰始り又うかの事をきりてねりへとも
 於あつさるいとハさうくありさるいとくくや何處
 もくくしてよむ心也於の字心をとむへい家う玉
 の事を切明けて遠き國斗号み教るもいこの
 事なるは是又ひとの心を人く能するうと

源氏を金瓶梅のそとハ一系予源氏の道理を
 明あさるく「やを美神も衣と云んあうせり
 つこのそれとなりれたは源氏を源氏と云ふ
 此等ふて此相語の大切なる事ハ明かく押て是
 日本に事と中く誦くもの相く又韓退之云宰
 予畫^{エカケリヒロニ}寢奢侈を憎むの語なりん畫少畫也混
 雜く事ん

第五 病中倦夜

一は切ふ老婦時夜と云病有りおゆきさるおふ
 一。さう方もやと倒れて今ある事乃やうさう

世の中よりそくみ侍り者五志六阿まやそ及裡可
一着をばり

後乃世をかきけとても一とそ

あゝ如旅ふし小あの中し

漏る沈れ滴。障あう絶又聽。東窓未生白。枕上

一灯青。右雪溪先生病中侍取之吟。時今思云

少如

良薬甲、病魔を遁れし時

ふし生る何をまき風上世と

障絶窓志らく灯空し

才六挽詞竿秋、をス

又存在乃時ハ立アあみねるふあひ。徳をつまひ
とををあせらん。誠孝とをあり。考は法かふ海はる年ハ
泣きを地ははるぬき天をあふく。世を是孝子事^{ツコフ}ふれ一
也。なとてよあつふ子信有ハ常はて。若と如引る
ハ信の指。その指のはしあさあり。然る不位きを當
るは信ありて。其信信ふりしきれハ又其指をん
や。そま誠したあふふをのへ面^{オモ}なおもに。と誠信り
信を解るそまに似たり。只ん乃乃ふ不誠常ありし
くそれ人をあつ。はるは家を識して。其必信ありと
謂ん

昔昔物子橋山と云妓あり。百人肝を縮め朱
 唇を窺ふ。とやうり其金用盡せども心残タカ境
 めを酒家の一丈平生生涯の候子志しうかひ傳カシツく。
 或対まね佛の法にて巫電志る。此も髪も神も甚
 子便齒の刺みちのくれ方おあんと顔子身をさう積り
 秋風もたや吹きさへくを乃其の

哀れに寄る事さあつ川の岸

とよみてとやうり切拂ひ山林ぬかく入るよ。
 恩乃里人有かろくたをいとくかろくお振
 くれハ

恩ハ下ニ

其く踏る事さあつ川の岸
 そみそあ衣幾休ぬれも

又

系けのむり一紙今も引うく
 風乃そ字く海山をこの里

岩のく字の詠奇ハ蝶より一橋の独寂さす叶
 へる。奇の風情ハよもかくおも真乃ん景景
 ねるさやうさくうへあうんと感さへ。好く
 系竹の昔とつ家をそ。此も乃書となさんと
 あり。怪くあやみんるハ必の庭をう山神

きんくきん
 形迹
 景迹
 蜂媒 劉後持
 蜜口傳未好信通
 為花評品城東凡
 香鬘點得花英去
 疑是無頭利市紅

文集三

四

樹中の一僧

西林寺惠持禪師
木室三百歳

庐山志云

如く。其是也のよき評品しき東風子如く
 せり。二ハその。さきん石劉後持の評
 成下之き歌之陳留縣の樹中の一僧。三百歳後子
 磬を以て生滅を證く又去。一塔不言笑ハこ
 ぶ八年光乃移くさる栢瓦。骨綿堂苑乃造
 物將相不致く富貴ふくく経歌子就。永
 叔り年茂動うせ辞をかるとも。いづく今此
 静山老人の寢と夢月ハ四面風色及く
 くくく

才時庵淡く存て於是乎書

將相に至りて

仕官而將相而
帰故郷 石起語

喜でこれをとス

喜為天下道也

於見乎書曰ス

永叔直錦堂記

才八 幸化不也ス

訪るあるを。其坊之乃哉用事。この小おと
 ありて。東子ハ。一如。この智不た。く
 み位。のれ。けの。よく。日教を。い。れ。流。三
 昧。中。窓。乃。雨。子。千里の。旅。を。ん。子。冬。之。梅。樹。畔
 二。雲。よ。い。と。お。わ。あり。り。よ。割。古。キ。名。を。く。家。八。栢。を
 朽。く。く。ち。は。家。栢。を。あ。り。か。り。か。り。く。小。ひ。め。五。五。れ。也
 道。を。道。乃。泣。を。い。て。得。信。を。あ。ん。と。風。雅。の。神。の
 初。なる。人。一。別。文。を。ま。ふ。ま。さ。る。と。云。か。く。て。も。と。や。乃
 此。の。成。と。也。一。橋。乃。清。風。を。流。り。時。これ。復

詩

道の泣
枕心故去
乃奈道位
其の事

廿九 流斜主人に手紙

牡丹小獅子一体に新志あり。前非皆汗。清風を流し
て。謝す。辞も早もくあり。と。朝屋を占り
歸ると。指尼。洋尼。別出立。美佳。流。接。府。と。尸。昔。親。仁
と。る。く。も。又。孝。余。り。面。白。乞。又。袖。手。隠。し。尸。以。玩
先生へ。う。く。く。少。中。て。う。く。と。

廿一日

廿十 甚舟より志素を贈る。時五子

此作京の男を。さ。く。子。よ。く。わ。く。編。書。八。目。下
あり。と。拙。子。の。む。と。け。ま。ま。の。子。と。

廿七 甚老のあまの海耳一腐り瓜

礼を治也。我到て。吾也。人。以。齒。為。て。之。折。之。を。知
ら。ま。世。人。執。火。凡。と。急。る。之。の。患。く。石。瓜。空。以。之。一。
今日。厚。志。深。う。く。古。欽。表。や。と。明。く。て。物。以。して。尸
附。

廿五 伊丹寒泉へ贈る。甚ハ先考体斗清浄余

年々々也

ワ。の。ね。く。常。母。側。と。て。武。陽。小。有。一。時。才。町。を。至
る。使。来。り。ぬ。吾。小。座。一。く。披。き。ん。進。て。白。あり
杜。宇。を。東。より。体。む。を。を。也。

半町

句中留あり

轍士ハ昔々
 浜河守
 注足同シ
 和章騎馬
 似東山
 飲中八仙歌
 三瓦兩全
 妓ノ集ル施
 舎ノ水許傳

轍士後のしく歌む。浜足りやふまハ船子乗らじ
 沈碎の一書くと結糸ふ。昔今三月雨舎のな種
 来つる松のちいらハ朽くて。又あつとやきて毎年回
 一う〜。口十〜。ふと〜。ちりきれたんふた〜。出
 り家とま〜。夜ふりとず〜。らま〜。我。彼柳をう
 き〜。り家おの整りもやう〜。体中ともま〜。阿〜。かさ
 けり〜。ハ。の。跡。う。垣。根。も。と。〜。と。ふ。り。と。卯。め。花
 の。ち。る。れ。古。る。子。ほ。〜。き。波。の。一。白。子。ハ。無。阿。り。り。り。
 涙は破てちむきをを抱き。阿付下ならぬ御座の

跡の垣根
 後、於に懐紙
 子よを利に
 名ラ讀と
 とも也

達人。今雅をぬらう。居んや。時己ふま〜。泉。流。言。ん
 よ。孝。の。道。を。盡。〜。て。又。新。ふ。先。人。好。る。子。志。〜。ふ
 一。節。月。日。の。昔。を。り。よ。ま。返。〜。て。あ。る。を。吞。声。を。放
 て。と。ら。め。あ。る。さ。ら。ひ。と。そ。空。中。け。ま。表。文。の。ち。〜。ま。き
 泉

昔後らん函も回〜むめのちりね

誠ふれゆめき〜。一白阿ハ誠小品〜。如下姉。母
 も白ひて子経美花をか〜。ちりり〜。ま。い。あ。〜。へ。今。の
 おう〜。り。も。母。を。〜。ら。ま。て。ハ。世。の。上。人。の。真。体。も。こ。の
 れ。な。う。〜。志。〜。ね。糸。の。付。成。〜。ふ。尼。知。り。始。如。こ。控
 了。〜。ゆ。ね。そ
 ち。〜。や。ま。ん。ゆ
 字。祇。自。書。讀
 ち。〜。奇

心裡吹毛
禪語之

よのへある心むけし。至って孝行んよの紫まも
 耳たやその凝りそるを中しく動り家朝夕の心
 裏吹毛。常々磨スの一棧高く遠く。佳小選一あなが
 ちよ柔よ折ひて甚日そ表のねろそうたうぬき
 泉の水流。雪ハ環よ白花れ光りを澄へて。孤岡成
 破了。皇都を左りまねし思也なうく表状を厚の
 せうくふともあひ家の日を算へ。旨酒を置てくら
 實害ふ命を。吾小室。霜夜けをけ。祝ふよまふ
 輝光。い。よ。炎風をそらふの寒泉別甘泉う。輝光眩
 耀。厥。福をくくする。あ。強く長く極うたうい。

輝光、い
垂極と云と
終りこ
泉二つは文格ナラニ

いさふぬと云
うの文をき
泉二つは文格ナラニ

才三 白拍子之画讃

源のさねらはくへゆあそんとてはうりたる付り山
 崎を命とたふふけふもたあはとよみ結てさ
 一。うぬてあるハ母をふへ
 形。う。平陸一。転きか。ら。如。雪。乃。也

下ノ白ハ

なにかあわれのうさうらん 志ろめ奇

才三 大圭碑前之文

石を切る我運ひ。姑却圭子ら志氣一を彩よ

筑末さきさき。化善乃へとなまこ。磯平羞瓊ぬ
さうひて。乃志ふう。いよくかたた交ををを
ぬけんや。やうと。兼し。老安や。古くと。境あふ
むく。の。風。程。おと。る。是。ぬ。る。何と。なく。神。ぬ。ま。徒
事。

おとひのけあさ名をまの玉かハ

右葉月三日妙導招提子入る速く

才四回脈之六と兼 宿藏主

葦端
詩經

誰謂萑子角あし角あしは牡丹花老人必塗ら
ん。胤小牙あし一牙あしん。姦らし援ん。適其る

白羽ノ白
蓋子

洞云先生。於子花。夕子花。六つれ也。噴を阿る也
ひ月ふりち梅を第ふ。そ白きる。白玉の白。甲子ま
らく。と。さ。さ。この。性。子。あ。は。白。羽。の。ふ。子。あ。は。次。
宿屋乃宿あり。邪老人乃。さ。中。れ。外。と。若。ら。麻。子。あ。は。ま
才時庵の。お。は。た。八。甲。子。金。粉。を。塗。る。掌。中。小。愛。也。是
ハ。唯。四。明。と。狂。あり。重。萬。を。以。酒。子。換。と。る。い。ま
四。孔。字。を。名。法。也。希。を。持。引。口。と。人。乃。報。也。ハ。別
宿。屋。と。呼。屋。

ゆり子なる磯乃岩屋なりとむる也を

いくや波流かきさきわん

と古人をよみたり。至福くそ家深く稲音しく
神さう人知して年相長く。かかく学ん遊ひ成
をいや百廿余存せんく世

才五粒光細小むうい金れをいすの鑑
細立て鑑りういさのぬおうを

此は積千餘
ヨリ流りて
今皆別約用
こあら

とハ。香子まふの自之は鑑をいす二東大文へお

あさる侍

清原人なちと第ふ山うつ

粒光ちく咲

才六粒八とちう侍

道人米元章は筆架成婚す。李白三才筆生花
自是才思日進と鑑す。孝是成好く筆の及り
あふはく如文。画以名あり。才時危筆筒成はる。一
一紙こまの取法奇なる妙も好いとあり。程とれた
の傍珠を焼金火紙照し。一んふ跡うまぬ林成
はるねハ秋も文は。美是を夏見ハ宋人富の鑑
て世はるすそ好く。危の春風さうひ急は取事毛
あふ。一。鑑は粒八昂ハ奇矣如若若人
死くもふ。麻もあふん筒の中
みはるきの鑑を新乃そちとめて。あふたふひくハ

と字新あして。歌して。能因はうみう。因平きと
おく朝夕此岸をそそり有る。

才十七 樽雪へ返事

山樊是弟
梅是兄
黄言直
法吟く土つぎ葱餅り。いんねを。肥る。傍細き。鈕の
菊も。又と山樊と。楽々才あへ。一三谷と。あはれと。海
へくくれ

本城の脱く。遊く。縁ぬら。かき。

あく。不用心と。下わ。ある。城の。字。れと。独笑。海。海
ア。新。ト。し。

才十八 武陽渭北に遣ふ

東より。幸。あり。と。六。時。く。宿。向。へ。し。び。度。万。白。帆。坊
る。故。あ。く。み。ち。さ。う。と。才。か。東。福。寺。塔。取。乃。門。小
才。く。一。字。あ。る。是。を。お。ま。ひ。す。と。無。く。て。智。一
聖。一。と。力。く。く。屋。乃。若。楓

長く。通。天。橋。上。能。法。風。を。吹。さ。ま。へ。う。一。穴。賢。と

才十九 阿みこの陰翳

小山僧都の。堂。平。の。ち。り。て。そ。や。れ。法。と。あ。り。と。て
光。君。乃。あ。さ。ら。く。ゆ。ふ。う。ち。み。も。只。小。娘。の。事。を
あ。ま。れ。と。す。ら。ぬ。も。誰。り。始。あ。く。如。我。の。一。

一 元久三年三月二十日とせり。延宝二年廿七
 夕一日を五月月を遊ふそふ文の文のうへなる
 其ふふふふとめし世の人此衣もつり卯の花初音
 さつき橋おひひととん 桐かろき涙あうりめ
 をなとて侍りて再びおりお年望の語あくく
 夏の字ともしとよの句と。秋めをふなき事老
 了とせり之がう清水ちち稲あしてぬ路不麻を説て
 二 之友喫茶後後作の折し。其句の花と天といひ出
 脚後を結ふとやく小橋ゆく決し。謀り世のつね
 河原なしく殺きくくを懸へた守と也と。氣を結めん

を屈して来りて。從來めく。控るも折るなれと
 も又心のまじくぬはんれとの様ありたりと。若くお
 控。奇吹海ふ心の船を流へ。又ふとくは道もありたりと
 散蕩の目をさね敷く。うもあ。死ねるふ。其令
 畫て別指腐す。舟中又よ。つと。其心。其し
 と。言ふ。りて。を。一。夜。中。の。語。を。な。る。と
 正しく。夏の。こと。若。良。春。を。ね。り。お。暫。汗。を。く。ん。異
 一。遊。吹。下。ス。四。月。の。風。も。白。ひ。な。れ。中。小。玉。一。夜。と
 や。唱。へ。咲。て。地。彦。不。入。て。漸。ん。静。ま。り。於。是。春。の。價
 修。る。自。負。より。いと。心。相。り。お。り。り。き。涙。と。り

吾一宿寐よいのちまねん神必吾痛みのりあふ
る古今其例多し。常時憂念を平慍む人。自他端
あり。お推るる已跡へき弦なると異とともみねふ

遠うくぬ家むりくたゑしきよ

老をいのり涙るんとてうらまき

才三十七回忌は帰るなま句

秀鏡の如し先考十七回忌遠念を暫かて結吟
のち折鎌子月夜をぬくゆ洞涼し一白と輝る

世をる日やまも伴縁の右た

才三勸進子歌

一朔雪路果然として下るハ松原危古くは
なりくろ。ゆり干をあつとや。節を幸て神のあ
けの山流流れ林を見すてけあり

暻ハナケレて云通は富て書を賞へ。世に富むともう田を
賞て用る事あり。神。句中まあり千鐘あるん貴
いまことの富之志うハあれと

ふく書考石く飛苑北橋作し

肯享保十一才書三月仲院

御照文

才四 噴洞亭小遊ふとく果

真樂
濠梁ハ
莊子秋水篇

元文二年十一月十日余、言岡氏後苑の楓葉いろ
めく錦の屑を拾ひ、人々くおすゝしほさうへ
海うへ群鳥は、日如舞地波を洗ひそは
つせとなく、静り流きさるる、みちち葉、なると川、や
かぬ、みも澄くそ、わり。真うか、真ふの、む。濠梁今
あり。さ、本、小流るるを、お、流、ふ、う、を、 御、創、る、も、今、更
あり、く、思、お、と、は、は、妙、や、き、く、か、り、て、流、お、と、打、を
る、雨、の、あ、り、流、す、軽、く、二、三、度、斗、る、あ、く、さ、う、て、反、照
り、き、く、光、さ、る、う、り、の、候、た、き、拍、語、す、ま、ふ、く、さ
ふ、似、の、ら、い、ん、な、き、人、も、ん、と、ん、や、や、也、世、時、一、放、流、を、保

形、ち、う、き、初、の
比、小、院、お、と、
中、院、内、為、云
下、畧

五常樂

つ、へ、く、も、あ、り、は、本、ぬ、く、極、海、と、い、せ、く、山、は、さ、う、く、一、簣
功、尺、ふ、み、ち、て、ゆ、さ、や、も、遠、平、原、と、さ、ま、ぬ、る、也、
う、た、き、一、流、を、あ、ら、ぬ、も、れ、な、然、の、珍、清、を、お、流、さ、せ
そ、下、流、は、一、く、ぬ、さ、も、た、と、い、昔、め、さ、て、そ、樂、ハ、充、充
子、池、上、高、岡、は、望、き、く、た、た、う、く、一、遊、び、も、あ、り、又、の
常、の、一、く、へ、さ、く、平、河、河、く、う、て、庭、の、為、ハ、丁、越、ふ、さ
ふ、お、ら、く、は、な、や、も、お、び、一、聲、を、あ、ひ、く、感、備、筆、を、や
笛、流、あ、り、と、あ、り、一、か、く、あ、り、ハ、蕭、を、吹、き、志、こ、り、て、藤
虫、の、音、を、さ、く、一、む、南、ハ、お、光、梵、字、は、鐘、声、時、々、持、り
ハ、さ、く、と、ん、え、り、。流、子、六、時、堂、の、き、く、一、く、空、を、通

梵、は、ら、ハ
西、は、取、り、也、

ひらる。西やま建つまきま風極くあめうーた佳旅こそ
りてく上久ぐれ。一くなま〜如雪如暎不。うりくま
お井乃夕言いふてそくふハセ

上畧
家之存を
古の暖
漱子記

家之成去布して朝乃時雨うぬ
庭紫の樹乃紅世界なりくう

才七五 紀別戸田何某三回之一集

菰野之指示
卯八人
蕭相國
世文

又本古衣乃暮秋花暎交たりも世の飛人のあ月
雪いささひみうけてほるの影を。有日月の三秋も満
くま。おとよ平な凝して指示項人ありとは草まの
あまありくま

一二

一二あり秋の存草乃る

面上三年土
まの州又生
老杜

面上三年土。秋風又白ひをくむ家ハ山里昔かこ人
ちる

才七六 書平たくま〜人のま〜人

いあ秋のほめ我筆第巻乃るうみりんか
く又恒あり。いそ〜いひも〜あつ〜ふとみ
の事えりふ。九月十三日とふ平そ身はさる。
お道る路の志く短さその方へはら〜
屋てゆるれとあ〜てふ。子孫中あも昔〜あか
あのみたるむのま〜ふ。な〜か〜限〜てゆきらし

け。んよいひ包て。新雪のすををいさるく如一言
 二言。海は青は教古の文も叶ふへするをいひ終
 了。ハ。佛の心も海はよふえかりに。く。あ。は。な。ま。
 を折。島は横めく人笑ひ草もいふや。花の思を
 あらうひさつ日も日敷まきまら。たさきむつきけ
 ち。月影を船く。旅なり。海は志おろく愁る月の
 程も。ま。い。く。さ。い。の。人。あ。み。た。く。終。と。由。り。ふ
 おとひ乃等なみつう。むきひく。目とどち終く
 月小傍を他をてよ。盡る事あり。げ。ぬ。る。き。く。蟬。乃
 羽の。く。く。た。く。落。き。濃。た。り。と。お。と。ひ。散。り。て。ま。る。

旅中
 去陽
 不意

子といふその。たさ。成。力。あ。く。押。流。は。境。界。干
 流。き。く。掃。く。あ。く。ま。や。う。や。う。け。く。中。子。落。る。家
 と。別。る。ハ。く。ま。る。家。を。子。乃。ま。と。子。を。終。て。あ。く。な。ま
 う。ん。ハ。ま。ま。ふ。う。か。し。ん。あ。ふ。卵。乃。花。の。泪。を。あ。く。み。て。
 神。言。乃。曉。ハ。清。く。う。く。さ。さ。く。も。又。来。る。夏。を。あ。の。人
 ふ。ん。を。あ。く。人。ハ。う。つ。た。誰。れ。地。境。あ。く。人。あ。く
 は。い。は。神。計。あ。ま。た。ん。と。夜。は。あ。く。き。み。ハ。人。の。う
 き。を。引。流。す。折。ゆ。可。孝。の。書。ハ。か。く。空。を。あ
 と。香。編。庵。を。あ。く。せ。る。ふ。ん。と。ま。げ。く。て。路。を。た
 伝。る。子。は。神。え。て。命。ふ。ら。ん。と。あ。み。と。は。は。

魂消

ア一奇の心。ほそくぬうく神んくけ引くゆふら。
きふをそよくうたて。オはつう福んよあへん平
作まる洞か如と。アうあまもいひそくあひむをひて
ぬ。ちうそ孤灯ふして信の立派も自をそく。指部て
障く若来しきるみを信とくうて一てハ。何と
くあうせし事の中く悟るそくうふ沈んれとあ
た西月あも

吾を去
人を去
諸説其
を抄ふ
後實之
一掃如へ

お平亮ておまひく世は花松楸
熱を療しむる平運あう。我う一家の要を便く
風を起しあう。あまのくふ。夏花はる地のくハぬ。日

ハ生キ。月死ス。あんそ人のうへを也

才七 林外老人への贈る

茶室因本林外老人。昔よ茶室遊て至精至好人く
茶座を設く。光陰此年六十之賀あう。まか久を賀
平。則候く六十六

亀乃も我引も飛井の水始春

才六 後東亭 泉境只情別業之
濱亭也

後京極秋風も合の空も切ひのねとあつてハ西平
うたうたうり。はまう西の海をほろそ。南運際
く長波あひくあり。北平岸の松連なるをあむり

神イザノミコ御靈ハ
伊弉諾之命
事畢至吉云
道返大神ハ
泉門小塞ま
寸大神也
柳原也

く。深ナカのみみはのさ前を遣ふまう。ひくく如風ヒは
る風の塵汚をぬせ。いふもす清くまふと。南と指
さるるるらと東冥酒と宮たけつと身ふゆ人。ゆれ夷
柳原也
て。二三度三声眉を低ま。まふは信うたて。共平五不
必やいひ弦ひて。子作と答ふ。けし風と千景。暫く破
らるへ。道返の大神。さや。心を定神え。於是島也唯確
きとハ
急度也
島也臨崖之
阜陸をひ
海賊

去虚ハ海ノ
興ノ作者名

を穿て去虚うとのまな威一。たきう小孫ふまの
うたるるりハ暫時うたあうと。操龍を握一時小
四時の強をばて。嘯て重おろして外ス

其く名大星と護まへ一。家安去平常ふあ人
所為久たきとと表之揚は之

二完係成希子文下流

才九門生了人句并

夕立乃雨とと天子のいうりハ如那

天子乃過ハ日月乃蝕のこ一。民皆之疑ん

了て合きて三吟と奇化と事此是を放てハ六儀の凡頌
言月花鳥別神惠ふ叶ハ神慮別六合有彌
らん是は是を退て納めちり一平一原と杖の標
ちり事をもししとくぬ

右全篇門人艸々庵雪川模寫之

淡々文集卷三終

凡首起奇作漢子一り
四時の飛經をくもふ
古詩文素朴句句
其時乞て彫る雲林
子りて人刻多白くを原

くぬきんしん川かふ
雨土能花の舟もさ
銀すききり口一り
高をむきん花に
舟のむきり口一り

くぬきんしん川かふ

五洲館

島林

友

文貨堂誦諧書目

半時庵淡々文集

前編三冊

出来

同 後編

嗣出

同 数句集

全

行脚集東東龜

富天選

出来

押花宴

全

出来

續蛙海

半時庵高判拔書

近刻

寛保二年歲次壬戌十一月望

浪速書肆

梁瀬傳兵衛藏版

心齋橋筋北久太郎町南江入

